

在宅医療だより

スカイベリーな在宅医療を目指して



つるかめ診療所（小山地区医師会） 鶴岡 優子

スカイベリーを食べて、栃木県民でよかったと喜びをかみしめています。大空に届くような美味しさ。確かに味も見事ですが、大きな円錐形が美しい。プレミアムな苺を味わいながら、これからの在宅医療に思いを馳せています。下野市の小さな診療所で働く私達にとって、多職種で多機関からなる地域連携は切実な課題でした。2011年の震災で危機に直面し、その直後から多職種協働のためのつるカフェ勉強会を始めました。

「つるカフェ」は、在宅ケアに関わる専門職と市民が一堂に集まる学びの場です。お互い愛称で呼び合うなど、職種を意識せず楽しく活動してきました。最近では「顔のみえる関係」が強調されますが、顔がわかるだけでは実際の臨床での協働は難しい時もあります。つるカフェでは「顔のみえる以上にお茶する関係」を合言葉に「腹や腕までみえる関係」を目指しています。

月1回のつるカフェ以外に、「ふりカフェ」も開いています。ひとりの担当患者を中心に、ケースごとに深く掘るような振り返りをおこないます。参加者は担当の専門職に限定され、信頼関係をベースにお互いの価値観に触れ、これらを共有します。この振り返りはチームケアの質の向上につながるだけではありません。患者さんが亡くなった後の、デス・カンファレンスになることも多く、プロフェッショナルとして終い込んだ「自分の（人間としての）気持ち」に気づくこともあるのです。

年に1回は「つるカフェ市民講座」も開催しています。疾病や障害があっても最期まで自律して自分らしく生活するためには、住民主体の地域づくりが必要です。地域包括ケアシステムの根幹ともいえるでしょう。もともと専門職だけの集団だったつるカフェも2016年からは市民に門戸を広げ、今年は「防災からとりくむ地域包括ケア」というテーマで知恵を出し合っています。災害という危機感を共有し、市民として、専門職として、自分たちができていることを考えています。

ご紹介してきた「つるカフェ」「ふりカフェ」「つ

るカフェ市民講座」という3つの活動の繰り返しを「つるカフェ3重スパイラル」と呼んでいます。在宅医療という日々の臨床を実践しながら、学ぶ、考える、共有する、を繰り返すことが理想ですが、継続は簡単なことではないと実感しています。患者や住民と向き合って診療や対話を続けるためには、チーム医療に工夫が必要です。どうしても医師に比重が高くなる権限と責任を、チームでシェアする方向性を日々模索しています。

栃木県には県で統一された医介連携ネットワーク「どこでも連絡帳」があります。実際地域で使われ始めると、現場の雰囲気のみるみるうちに変わりました。ICTによって、効率性と透明性、そして安全性が高まることになり、在宅医療の質そのものが高まると感じています。またグループ機能を使うことによって、つるカフェなどの勉強会の組織運営にも役立ちます。しかしこの便利さは、信頼関係を基盤に成り立つもので、あくまでもチームのコミュニケーションを助ける道具にすぎません。栃木県の在宅医療は先駆者である先生方の功績が素晴らしく、すでにネットワークができています。先ごろ日本医師会館でおこなわれた在宅医療関連講師人材養成事業研修会では、多くの本県関係者が壇上に立たれ、なんだか誇らしく嬉しくなりました。

地域包括ケアシステムをイメージするための有名な植木鉢モデルがありますが、最近では土台として「本人の選択」が強調されるようになりました。日々患者と向き合って小さい輪を作り、時には深く掘って振り返りを続けていきたいです。医療をどう選択するのか？どのような人生を送りたいのか？患者にも自分にも問い続け考えながら、「選択する力」を身につけていきたいです。地域を見渡して時代の波を感じながら輪を広げていく活動も継続していきたいです。深い掘り下げと広い拡がりを繰り返す正のスパイラルは、軌跡をたどるとスカイベリーのような円錐になるかもしれない、そんなことを夢んでいます。スカイベリーは、今が旬です。